

# 平成30年度病虫害発生予報第3号

平成30年5月16日  
鳥取県病虫害防除所

## 予報の概要

農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	平年並
	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	平年並	やや多い
	イネミズゾウムシ	やや早い(中～平坦地) 早い(山間地)	平年並
ナシ	黒斑病	やや早い	やや多い
	黒星病	やや早い	やや多い
	ハダニ類	やや早い	平年並
	アブラムシ類	平年並	平年並
果樹共通	カメムシ類	平年並	やや多い
スイカ	菌核病	平年並	平年並
	つる枯病	平年並	平年並
	うどんこ病	平年並	平年並
	アブラムシ類	-	平年並
	ハダニ類	平年並	平年並
ネギ	べと病	-	やや少ない
ブロッコリー	コナガ	やや早い	やや多い

## 気象予報(抜粋)

1か月予報(5月12日～6月11日:5月10日、広島地方气象台発表)

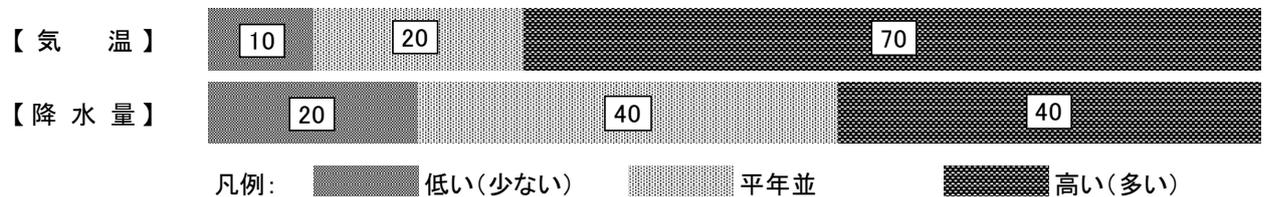
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

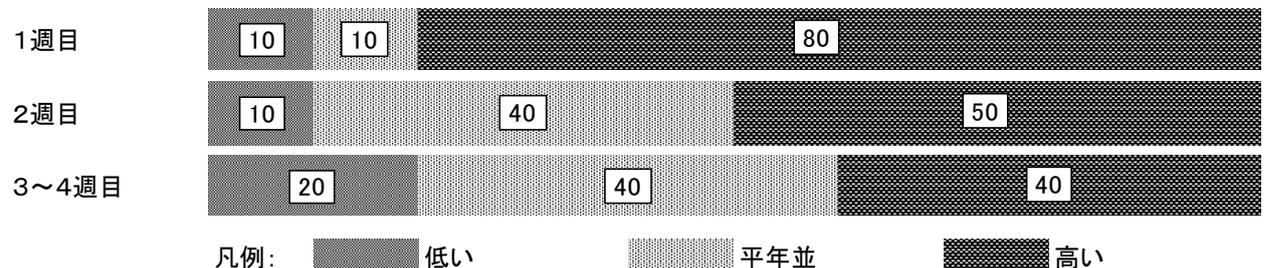
向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

### <向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



### <気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [イ ネ]

#### 1 いもち病（葉いもち）

##### （1）予報の内容

発生地域 県内全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### （2）予報の根拠

ア 5月14日現在、苗いもちの発生は確認されていない。しかし、向こう1か月の気象予報によると、気温の高い日が多いことが予想されており、苗いもちの発生に好適である。

イ 前年の穂いもちの発生はやや少なかったため、種子の保菌率は低いと予想される。

ウ 長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く普及している。

エ 向こう3か月の気象予報によると、6月は気温が高く、平年より曇りや雨の日が多いと予想されており、葉いもちの発生に好適である。しかし、7月は期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が少なく、期間の後半は平年に比べ晴れの日が多いと予想されており、葉いもちの発生に好適でない。以上のことから葉いもちの発生時期及び発生量は平年並と予想される。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 苗いもちは急激にまん延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。使用薬剤については、病害虫防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

ウ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の見回りなどを行い、早期発見に努める。

エ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いため、補植後の残り苗は速やかに処分する。

オ 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤およびヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場およびその周辺ほ場における使用を控える。なお、本系統の育苗箱施用剤については、引き続き県内全域において使用を控える。

#### 2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

##### （1）予報の内容

発生地域 県内全域  
発生時期 平年並  
発生量 やや多い

##### （2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本病の病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカの発生時期は平年並と予想される。

イ 前年の縞葉枯病の発生は多かったが、発病程度は低かった。

ウ 前年のヒメトビウンカの発生は多く、本種の越冬量が多いと予想される。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 病害虫防除指針等を参考にして、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

イ 前年、縞葉枯病が多発した地域では、ピメトロジン剤を含有した育苗箱施用剤を使用してヒメトビウンカの防除を行う。

### 3 イネミズゾウムシ

#### (1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや早い（中～平坦地） 早い（山間地）
発生量	平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月第2半旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。

イ 5月10日現在、県東部の早期田植ほ場（4月下旬植）への侵入は認められていない。

ウ 5月10日現在、有効積算温量から推測された越冬世代成虫の水田侵入盛期は、中～平坦地では5月13日（平年：5月16日）で平年よりやや早く、山間地では5月18日（平年：5月31日）で、平年より早い。

エ 前年の第1世代成虫の発生量は平年並であった。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。使用薬剤については病虫害防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、病虫害防除指針等を参考にして、追加防除を行う。

ウ 直播栽培等の育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、病虫害防除指針等を参考にして、粒剤等で防除を行う。

## 果樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

##### (1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 本病の一年枝における越冬伝染源量は、平年に比べてやや多かった。

イ 県予察ほ場における開花期以降の孢子飛散数は、平年に比べてやや多く推移している。

ウ 4月下旬に行った県内12園の巡回調査の結果、幼果のポリ袋検定法による平均発病果率は2.3%（平年：1.2%）と平年並であった。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨の1～3日後は孢子飛散数が増加するため、降雨前の薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1，500倍液、小袋かけ中に有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍とポリオキシシリンAL水和剤1，500倍の混用液、ポリベリン水和剤1，500倍液など、小袋掛け終了後には有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを散布する。

## 2 黒星病

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 本病の腋花芽における越冬伝染源量は、平年に比べてやや多かった。

イ 県予察ほ場における開花期以降の分生孢子飛散数は、平年並～やや多く推移している。

ウ 5月上旬に行った県内13園の巡回調査の結果、平均発病果率は0.4%（平年：0.2%）、平均発病葉率は0.6%（平年：0.2%）といずれも平年並であった。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ファンタジスタ顆粒水和剤4,000倍液、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

## 3 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、平年より早い4月18日（平年：4月25日）であった。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場（慣行防除体系）においてハダニ類の寄生は認められていない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が多い園では、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

## 4 アブラムシ類

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（殺虫剤無散布体系）におけるユキヤナギアブラムシの新梢寄生は、平年よりやや早い5月第1半旬（平年：5月第2半旬）に認められた。

イ 5月第2半旬現在、県予察ほ場（殺虫剤無散布体系）におけるアブラムシ類の発生量は平年よりやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期はほぼ平年並の5月下旬頃で、平年並の発生量が予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液またはウララDF4,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

## [果樹共通]

### 1 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年並～やや多い。

イ カメムシ類による幼果被害が一部の園で認められている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生時期はほぼ平年並で、発生量はやや多いと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の発生が認められるナシ園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリオン又はスタークル顆粒水溶剤）2，000倍液などを散布する。

イ ナシ以外の樹種では、各地域の防除暦等を参考に薬剤防除を行う。

## 野 菜

### [スイカ]

### 1 菌核病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病はやや低温（15～20℃）で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1，000倍液、カンタスドライフロアブル1，500倍液、ロブラール水和剤1，000倍液などを散布する。

ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m<sup>3</sup>（床面積50m<sup>2</sup>×高さ2m）、ロブラールくん煙剤100g/300～400m<sup>3</sup>（高さ2m、床面積150～200m<sup>2</sup>）などを使用する。

### 2 つる枯病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内に降雨が侵入しないように注意し、過湿にならないよう開閉を行う。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

### 3 うどんこ病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

### 4 アブラムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量は平年並である。

イ 現地調査ほ場において、アブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。ハウス栽培では、着果後にウララDF2,000倍液などを散布し、その後発生した場合にはモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

ウ トンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液、着果後にウララDF2,000倍液などを散布する。

### 5 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、ハダニ類の発生はみられていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

発生初期にバロックフロアブル2,000倍液を散布する。その後発生が見られた場合はマイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

## [ネギ]

### 1 ベと病

#### (1) 予報の内容

発生量 やや少ない

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県西部の現地調査ほ場における発生は認められていない。

イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延は早いので発病前からの防除に努める。

イ ランマンフロアブル2，000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら直ちに、リドミルゴールドMZ1，000倍液、フォリオゴールド1，000倍液、レーバスフロアブル2，000倍液、フェスティバルC水和剤1，000倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

## [ブロッコリー]

### 1 コナガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

幼虫の発生がみられる場合、ディアナSC2，500～5，000倍液、フローバックDF1，000～2，000倍液などを散布する。

[おしらせ]

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。**

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第4号の発表は、6月6日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。